「体育館に冷房を」

亀井小学校６年　岡野　将忠

ぼくは、鳩山町のミニバスケットボールチームに所属しています。ふだん練習は、小学校の体育館をお借りしています。冬は動けばすぐにあたたかくなります。しかし、夏は何もしなくてもどうにもならないくらいに暑いです。
そんな中でもこまめに水分をとり、脱水症に気をつけながら練習をしています。

今年は、日本の最高気温を熊谷市が更新しました。昨年までは、その熊谷市とあらそって鳩山町が高くニュースになることもありました。
うわさでは、今年熊谷市内の学校の部活動が活動禁止になったと聞きました。
ぼくはスポーツが出来なくなるのはいやです。

そこで、学校の体育館や町民体育館に、冷ぼうをつけてほしいです。体育館ではスポーツだけでなく大勢の人が集まることが多いからです。
そして、災害時にはひなん所として使用されるからです。

ただし、きちんとルールを決めてむだのないように使用し、場合によっては電気代をちょうしゅうしたほうが良いと思います。

暑い鳩山町でも快適にスポーツができ、脱水症で体調をくずす人が一人でも減ることをぼくは願います。

「未来に広げよう！ユニバーサルデザイン」

今宿小学校６年　海老原　由理奈

私は、未来にユニバーサルデザインを広げたいです。小さい子どもからお年寄りまで、障害のある人ない人も全ての世界中の人々が公平に暮らせるようにしたいです。

ある日、学校の図書室でユニバーサルデザインについて書かれた本を見つけました。その本で、東京大学のすぐそばに、手話と筆談でコミュニケーションをとるカフェがあることを知りました。そのお店の代表の方は「聴覚障害者」でした。店内の壁一面がホワイトボードになっていて、お客さんが自由に感想を書き込んだり、お店のイベント情報などが書かれたりしていました。レジの注文は手話で行ったり、手話ができなくてもメニューを指さしたり、ホワイトボードを使って筆談で行っていることを知りました。声で注文できなくても困ることがないような工夫がされていました。私は、耳が聞こえない人とのコミュニテーションの方法を実際に母と試してみました。すると、手話だけでなく、はっきりと口を開けて話す、表情をつけて話す、身ぶり手ぶりも有効な方法だのコミュニケーションにも当てはまることがあるように思いました。色々な方法を使って、コミュニケーションをとりたいと思います。

ユニバーサルデザインが使われている場所やものは他にも、たくさんあります。例えば、私たちが使っているお札は種類ごとにさわり心地が違い、触って区別することができます。また、シャンプーやリンスのボトルも区別できるように、シャンプーのボトルだけにギザギザがついていました。出かけた先にあった自動販売機も車いすの人も利用しやすいように、お金を入れる場所や取り出し口が低い位置にありました。このように、私たちのまわりには、当たり前のようにあるものも、実は誰もが使いやすいようにユニバーサルデザインがされていることが分かりました。

私が住む鳩山町には、いろんな人が住んでいます。車椅子に乗った人やベビーカーを押した人、小さな子どもやお年寄りもいます。誰もが暮らしやすい社会にするために、私は、思いやりの心を持って積極的にコミュニケーションをとりたいと思います。心に余裕を持って、困っている人を見かけたらすぐに声をかけ、手伝ってあげたいです。

これからたくさんの人がユニバーサルデザインを知り、広めていけるように、私も自分にできることを見つけていきたいと思います。

「一人一人の力は小さいけれども・・・」

鳩山中学校２年　中西　総吾

今年の日本は、大きな災害に見舞われた年でした。大阪北部地震をはじめとして、西日本豪雨や台風の被害の他、非常に高い気温を記録するなどの異常気象、そして、北海道胆振東部地震による災害。大阪北部地震では、ブロック塀倒壊による痛ましい事故や、交通機関の大きな乱れなど、甚大な被害を被りました。

西日本豪雨では、緩んだ地盤が土砂崩れを起こしたり、ダム放水量の急増により、河川の氾濫や洪水を起こしたりと、２百人を超える死者を出しました。北海道地震では、一時北海道全域で停電し、復旧しても電力が足りない等、各地で大きな傷痕を残しました。涙すら出ない大変な人をまのあたりにしました。この夏だけで数百人を超える死者・負傷者を出しました。そこで私は、被災地の為にどんなことが出来るのだろうか、と考えました。

そのような時に中鳩山中学校では、西日本豪雨の被災者のために募金をすることになりました。私はどのようにするのかわかりませんでした。なぜなら、私は初めて募金活動をするからです。また、被災地は遠いし、生徒なので時間がないので、私が出来ることなど思いもつかないでいたからです。さらに自分は募金なんて興味がなかった上、考えたこともなかったのです。私は最初、私と同じような考えの人がたくさんいて、なかなかお金が集まらないのではないかと考えていました。

しかし、実際には違いました。募金活動の初日、大半の生徒が募金をしてくれました。この日に忘れた生徒もいましたが、たくさんの生徒が最終日までには募金をしてくれました。私は鳩中の生徒の熱い思いを知ることができました。

この募金では、最終的に９万円を超える額が集まりました。一人一人の出す額は少なくても、たくさんの人の善意が集まれば、やがてまとまりとして無限大に大きくなるのだなと思いました。

この活動の後、私はこれから起こることに対してどう対処して、どう生きていくのか。私にできることは何かないだろうか、と考えるようになりました。私はこの募金活動を通して、これからの自分の生き方を変えることができました。

私は今まで、このような自然災害に対して、ほぼ無関心でいました。しかし、実際に行動してみて、自分も同じ地球人の一人として、皆で支え合って生きていかなければならないということを学びました。私はもっと色々なことに積極的に参加・協力したいと思っています。

今、私は一人一人の力は小さいけれども、たくさんの小さな力が集まれば大

きな輪となり、絆として強くなっていくのだと思っています。

「保育の仕事今昔」

一般　　村井　小夜子

私は東京と坂戸市を合わせまして４０年間可愛い子どもたちと、毎日毎日楽しく過ごしてきた保育士です。それから今度は自分の孫を、すでに成人しましたが３人可愛い可愛い孫を育ててまいりました。幼稚園の送り迎えもしてきました。その時、園長先生には大変にお世話になりました。今日のこの話をいただきまして、嫌と言えない日本人なのでお受けをしました。

とにかく保育の仕事というのはほとんど体を使えばいいんです。頭はあまり使いません、かってにいろいろな事が浮かんでくるのです。

最近、物忘れが非常に激しくバックをすぐにトイレにかけるから背中にしょったんです。そしたらしょうバックを・・・たまたま古希を迎えシルバー人材センターで体を動かそうと思い、松寿苑の掃除をしました。その履歴書につい保育士の資格があることを書きましたら、事務長さんから来年このニュータウンに松寿苑東館を開園してその下に保育室をつくることになりました。ぜひ、来てくれと言われ、ノウと言えない日本人なので、はいと返事をしました。そこで今は、この保育園に勤めています。古希を迎えたこの私に、保育士の現場に復帰してくれと言うのです。こんなうれしいことはありません。

それで今は、可愛い０歳３か月から一番上は満３歳になる前の２歳児までの１３名を保育しています。ほとんどのお母さんがこの松寿苑で介護の仕事をなさっています。朝から車で一緒に来て、先生おはようございますお願いしますと言って預けて行きます。素晴らしいと思いませんか。

私が子どもを育てていた頃は保母さんと言われていました。保母となって保育園に勤めたころ、平成１５年に男の人も女の人も保育士となりました。可愛い赤ちゃんと一緒にいると私はあっという間に元気になってしまいました。子どものパワーってすごいです。どんなに嫌なことがあっても笑顔で対応する。子どもの心を受容する、わがままや甘えを全部受け止める。それが現役の時にはなかなかできなかった。何しろ１歳児が２５人、朝から晩までおむつばっかり見ていた。ところが今は充実している。一人一人を見ていられる。みんなばあちゃんに甘える。なんでもいいや小さな背中をよちよちとしてあげられる。背中にさえおんぶしていれば朝どんなに泣いていてもピタッと泣き止む。そんな子がもう５か月になります。３月になると２歳児までしかいられないので、ひばりという保育園に移っていきます。現在、少子化と言われているが、うちのお母さんたち皆さんが次のお子さんを授かっています。毎日赤ちゃんを抱っこしているとうちの栄養士さんにも赤ちゃんが授かりました。

包括支援センターに行ってみると、鳩山町は６５歳以上健康寿命３年連続、

男女ともに埼玉県１番、寝たきりになっていない、働ける、孫の面倒が見られる健康寿命。みなさんも健康で働いて社会に貢献して、うちの施設にお世話にならないで、頑張ってください。

小中高の皆さんはこれから将来を決めて行きますね。将来何になりたいか、しかし、最終的には働かなくてはいけない、それには健康と資格です。どうせ、高校や大学に行くのなら資格をとってください。資格さえ持っていれば古希になっても働けるのです。だからこれから人生決める、高校生・大学生では健康と資格をとって鳩山町のためにがんばってください。そして赤ちゃんが生まれたら私が見ますから。

「私の願い」

鳩山小学校６年　　佐藤　さくら

私の願い。それは、子どもたちがのびのび遊べて笑顔で生活できること。そして、これが、明るい町づくりの第一歩であり、よりよい未来にかかせないことだと私は思います。

私はこの鳩山町が大好きです。ここで、友達や家族、先生たちと一緒に成長できることはとてもうれしいです。そんな大好きな鳩山町だからこそ、未来の鳩山町も明るく元気に満ちた町であってほしいと願っています。

４年生の時、鳩山キッズダンスでダンスを習いめました。ダンス教室のクラスは３つあり、今は高学年クラスに入っています。毎週水曜日、包括支援センターで夜に練習しています。ダンスの練習は、準備運動から始まり、ストレッチ、筋トレをやり、基本的な振り付けに入っていきます。振り付けも難しくなってきました。みちこ先生はいつも、「笑顔を忘れないこと。自分も楽しむことが大切。」と教えてくれます。そんな先生は黄色いＴシャツをピシッと着たひまわりみたいな笑顔でとても元気な人です。そんな先生と一緒にダンスをしていると私たちも自然と笑顔になってきます。みんなで踊るときも、タイミングを合わせるのはとても難しいですが、動きが一つになると、つまり気持ちが一つになるととても気持ちよく、みんなで顔を合わせて笑顔になります。そして、発表会でステージに立ち、家族や友だち、地域の人々が手拍子や拍手をしてくれたりなどその場に一体感がうまれ、とてもうれしくなります。そんな風にさせてくれるダンスやダンスの仲間、先生、友達、家族、地域の人々、鳩山町がとても大好きです。

また、６年生になり、国語の授業で「未来をよくするために」という学習をしました。この大好きな鳩山町を明るく楽しくするために、自分に何ができるのだろう。そう考えて私はまず、お母さんの仕事場である「つどいの広場ぽっぽ」に見学に行きました。お母さんは子どもたちとサッカーをしたり、おままごとなどをして遊んだり、帰るときには全員と笑顔でハイタッチをしていました。子どもたちも本当にうれしそうでした。お母さんの姿はとても輝いていて、子どもたちを笑顔にさせるやりがいのある仕事だと思いました。そんなやりがいのある仕事をして、鳩山町を明るく元気にしたいと思うようになりました。

鳩山町が未来でも、もっともっと輝いてほしい。鳩山町で暮らしている人が笑顔の絶えない場所であってほしい、それが私の願いです。私はこれからも今の自分を大切にし、自分の周りにいる友達、家族、地域の人々を大切にしていきたいと思います。そして、大きくなったら、お母さんみたいに、鳩山町の子どもたちがのびのび遊べて笑顔で暮らせるような場所をつくっていきたいです。

「自然がたくさん鳩山町竹本」

亀井小学校６年　長島　由奈

私が住んでいるのは、鳩山町の竹本です。お父さんやお母さんが子どもの頃からほぼ景色が変わらないそうです。私の家のまわりには田んぼや畑、山がたくさんあります。田んぼの近くには、水がわいていて飲むことが出来ます。水がきれいなので近くにホタルが生息しています。夜に見るホタルの光は、なんとも言えないきれいな色で、この光は未来に残していきたいです。こんなにすばらしい自然が残る竹本ですが、お父さんやお母さんが子どものころよりもホタルが減っているそうです。このホタルを絶滅させないためにはどうすればいいのか考えていかなければいけません。

私の考えは、水がきたなくならないように川の近くにごみを捨てたり、きたない物を水に流したりしないことだと思います。これから私に出来る事は、ゴミがあったら拾う事を心がけていく事だと思っています。

他にも、竹本地区には残したい物があります。それは田んぼや畑の緑です。今年の夏は地球温暖化のためか、猛暑が続き田んぼや畑の土がかわいて作物がうまく育ちませんでした。地球温暖化が進行していくのは人々が出している二酸化炭素が原因です。そんな二酸化炭素を減らすためには、車に乗るのを減らしたり木々を元気にしたりと自分から進んで努力していくことが大切だと思います。

このように、緑や昔からある景色などを大切にしていくために一人一人が小さいことでも努力していけば、未来の景色は今よりもきれいになると思います。ホタルも絶滅せずに生き残れると思います。私は、たとえ小さいことでも少しずつがんばりこの景色を未来に届けたいです。

「Greet is important」

鳩山中学校２年　小川　莉生

みなさん、こんにちは！私は一学期、英語の授業でGreet is importantという言葉を習いました。皆さんはこの言葉の意味を知っていますか？
Greet is important　とは、あいさつは重要だ、大切だという意味があります。そこで私は生きていく上であいさつの大切さについて考えました。食事や睡眠、家族、友達、考えれば考えるほど大切なものはたくさんでてくると思います。その中でも私はとくにあいさつが大切だと考え、あいさつについて考えてみることにしました。

私は中学校で生徒会副会長をつとめています。鳩山中学校生徒会では月曜日の朝にあいさつ運動を行っています。この運動は生徒会役員が昇降口の前に立ち生徒のみなさんにあいさつを行う運動です。また、みんなの絆を深めたいという考えからあいさつと共にハイタッチも行っています。生徒のみんなは私たちがあいさつをすると、元気よくあいつをしハイタッチも返してくれます。また、生徒だけでなく先生方もあいさつとハイタッチを行ってくれます。このように鳩山中学校は学校一丸となりあいさつをしています。
その影響もあってか鳩山中学校はとてもあいさつの出来る学校だと思います。校内では元気の良いあいさつが飛びかっています。あいさつが飛びかうたびに学校の雰囲気が良くなっている気がします。また、あいさつ運動をした日は気持ち良く一日がむかえられます。

また、私は登下校の時に地域の方にあいさつをしてみました。地域のおじいさんやおばあさんは皆さん元気良く、笑顔であいさつを返してくれました。また、お帰りなさいとおばあさんからあいさつをしてくれる事もありました。この時、私はすごくうれしかったです。近所の小さい子もわたしにあいさつをしてくれました。とても心があたたまりました。

このようにあいさつは、人と人との絆を深めるすごい力を持っています。あいさつをした人、された人は皆、笑顔になります。私はこの鳩山町を笑顔のあふれる町にしたいです。そのためにはあいさつをすることが大切だと考えています。小・中学生の私たちが、自ら地域の方にあいさつをすることで、この鳩山町を活気に満たす重要な役わりを果たすことができるのではないでしょうか。私は最初、地域の方にあいさつをするのがとても恥かしかったです。でも、頑張ってあいさつをしてみました。あいさつをすれば地域の方は必ずあいさつを返してくれます。いつからか、私は恥ずかしいと思わなくなり積極的にあいさつができるようになりました。これからも学校や登下校の時などに元気の良い、相手の気持ちを良くすることのできるあいさつをしていこうと思いました。

あいさつを通して明るい鳩山町をつくっていけたらいいなと思っています。

「私と商工会」

一般

福岡　次郎

現在 72 歳、孫が 6 人。最初から商工会にはいり 27 年、本当に長い商工会生活でした。今回、言ってんべー聞いてんべー大会に参加することになったきっかけは、私が 12 年間お世話になった時の 2 代目商工会長の局長から声をかけてもらい本日、発表することになりました。

これから話すことは限られた時間ですので、自分の商工会時代の結果について話をさせてもらいます。何かをする時には仲間がいて、人とのかかわりの中で結果につながるという事なのです。

私が副会長を受けた時にたまたま、商工会の年間費は新しい人は１万円、その他の人は３千円の人、５千円の人と様々でした。多い人は４万円も払っている人がいました。これはおかしいのではないかと感じました。そこでまず、このことをひとつの形にしたいと考え、皆と話合いました。そこで、過去をさぐってみると、同じことを考えた時がありました。商工会の総会で決議されたのに、結果的には実行されなかったということです。それは、もし１万円にしたら商工会をやめてしまう人がいるのではないか。商工会がなりたたなくなるのではないかという意見が多く、結果的には中止になってしまったとのことです。私は、自分の信念を説明し、もしやめる人がいたとしても新しい人を募集したらいいと説明しました。その後、会長と相談し結果的には統一することが出来ました。一般会員が１万円、株式会社が 3 万円ということで実行した結果、特に問題は生じませんでした。

それは素早しいタイミングだったからだと思いました。まだまだ、県内の商工会の中にはそのこと自体ができない商工会もあるように聞いています。

私は商工会の会長として 10 年間勤めました。次に話したいのは納涼盆踊り大会のことです。町をあげて盛大にやっていた納涼盆踊り大会ですが放火という事件がありました。もし、盆踊りをしている時にこのような事件が起きたらどうするのかという意見が出て、盆踊りを中止しました。

その後、私はどうしても復活をさせたいと考えて、当時は予算がついていない現状から、町長に相談をして 40 万円の予算をつけてもらうようにしました。大会の実行は難しいと言われていましたが、総務課長をして退職した同級生に声をかけて事務局長として助けてもらうことにしました。やはり現場で活躍していたので、動き方が違い実行力がありました。その結果、8 月には納涼盆踊り大会を開催することができました。素晴らしいタイミングと仲間に恵まれていたからです。さらに 3 年後には花火もあげようと企画し、皆さんから寄付を募

りました。30 分間と言う短い時間ですが、130 万円の寄付を活用して盆踊り大会の後に花火をあげることにしました。また、おしゃもじ山のつつじ祭りも立ち上げて現在に至っています。その中で 3 月 11 日には東日本大震災が起き、祭りはすぐに中止の方向でした。震災への対応をと考え震災から 3 日後には義援金を募る活動を始めました。おかげさまで県連から義援金協力への話がきたときには皆さんからの義援金で十分に対応することができました。やはりタイミングだと思います。
納涼大会は今年は第 13 回ということで新しい場所で、盛大に開催することが出来ました。

次に私は PTA の活動にもかかわりました。鳩山中学校や鳩山高校で役員をやらせていただきました。鳩山高校では全国の駅伝大会（埼玉栄高の連続出場を抑えて）やインターハイでの円盤投げ（準優勝）などへの生徒の活躍に感動しました。

私は体育協会の、体育振興委員長として務めさせていただきました。鳩山町駅伝大会、元旦マラソン、グランドゴルフ大会などに関わらせてもらいました。その時代にもうまく仲間がいて支えてくれていました。

イベントの中で印象に残っているのは生きた鱒をつかまえて塩焼きにして食べるイベントでした。子どもたちもみんなが生きた鱒をつかまえるのです。みんなが同じことをするということが素晴らしいなと思いました。

行政の事は役場に取り組んでもらい、私たちの活動はどうせやるなら一生懸命にやっていくことで、仲間と協力してやっていくことが絆を深かめていくということだと感じました。

「海・生き物・未来のために」

今宿小学校６年　宮﨑　かりす

地球は人間のためだけにあるのかではなく、他の様々な生き物がいるからこそ成り立っています。そんな地球のなかで重要な役割をはたしている海。海は世界中の天候に影響をあたえ、空気のなかの気体のバランスを調整しています。そして、多くの生き物が住んでいます。しかし今、人間の影響でたくさんの生き物たちが死に絶えています。そんな生き物たちを救うために、わたしたちは未来に向かって努力していかなければならないと考えます。

あるとき、私が見たテレビに、ゴミだらけの汚れた海辺が写しだされました。その汚れた海辺をきれいにするために、ゴミ拾い活動をしている人の姿が写っていました。私は、この映像を見て、人間が汚してしまった海は、人間の手ですくっていかなければならないと思いました。

世界の海はどうなっているのだろう。そう考えて、世界の自然環境の本を読みました。そこには、人間がしている環境破壊のことについて書かれていました。私は、海のゴミや石油などの影響で苦しんでいる生き物に強く心をうたれました。世界では今、このようなことが増えてきているのです。

私たちは、何をすればいいのか。それは、一人一人が努力すること。その努力すべきことは身近なところにあります。海は川とつながり、川は家庭排水につながっています。こんなに身近にあるものが、海とつながっていたのです。そして、海をきれいにするためには私たちの努力で川をきれいにすることが大切だと思います。家庭排水からは、油や洗剤を流しすぎないこと。川にゴミは捨てず、進んで清掃活動に参加することなどがあります。このように、小さな小さな努力でもたくさんの人が努力することで、大きな結果につながると思いました。

今、世界では海を守る活動が行われています。私たちは直接海を助けることは難しいけれど、一人一人が努力するということが海や生き物、そして未来につながっていくのだと思います。

「いつの日か」

鳩山小学校６年　　谷口　佳穂

I have a dream one day I want to be a nursery school teacher.

私は現在、鳩山小学校に通っています。そこには、先生とたくさんの友だちがいて、一緒に勉強したり、遊んだり、とても楽しい毎日を過ごしています。また、ルンルンタイムや全校遠足など同じ学年以外の友だちとも一緒に勉強したり、遊んだりしています。この鳩山小で、たくさんの人と出会い、たくさんの経験ができる一日一日が私にとってかけがえのない大切な日々になっています。

そんな毎日を過ごす中で、いつの日か幼稚園の先生になりたいと思うようになりました。私は、小さい子どもと一緒に過ごし、成長していく様子を見たり、感じたりすることがとても好きです。子どもたちが楽しく成長していけるよなそんな場所を作っていくことが私の夢になりました。

幼稚園の先生であったお母さんや学校の先生に話を聞いてみました。幼稚園の先生になるには、資格がいること。資格を取るためには、さまざまな知識や経験、技術が必要になることを初めて知りました。例えば、一緒に歌ったり、踊ったり、ピアノが弾けたりなどです。大変そうだと思ったけど、それ以上にがんばりたいと思うようになりました。

また、子どもたちに教えることの難しさを知りました。子どもにも様々なタイプの子どもがいて話がうまく伝わらなかったり、集中できなかったりすることもあるみたいです。そういう子どもたちが少しずつできないことができるように、わからないことがわかるようになり、笑ったり、成功した喜びを感じたりする姿を見るととてもうれしい気持ちになるということを教えてもらいました。私は、とてもやりがいのある仕事だと改めて感じました。

夢をかなえるために、どうすればよいのだろうか。そう考えていく中で、一冊の本に出会いました。それは、あきらめずに夢を追い続けて成功したウォルトディズニーの本です。その中で、ディズニーのある言葉が心に響きました。

「夢をかなえる秘訣は、好奇心・勇気・自信そして継続である。
何かを信じるなら一心に信じること。決してあきらめてはいけませんよ。」

この言葉に、夢をかなえる魔法が詰まっていて、勇気がもらえた気がしました。

夢を追い続けることは難しいかもしれません。時には、かべにぶつかるかもしれません。だからこそ、今たくさんのことを学べる一日一日がとても大切だと思います。そうした中でたくさんの経験をし、知識や技術を身につけ、あきらめずに夢を追いかけていきたいです。

私には夢がある。いつの日か子どもたちと一緒に学び、明るく楽しい子どもたちの未来を作ること、それが私の夢です。

「乳幼児とのふれ合い体験授業」

鳩山中学校３年　木之下　唯人

僕達、鳩山中学校の３年生は、毎年鳩山幼稚園を会場に「乳幼児とのふれ合い授業」を受けています。

このふれ合い授業とは、鳩山町社会教育委員会議が、「普段、乳幼児とふれ合うことの少ない中学生に保育や育児を学んでもらおう」と社会教育委員、埼玉県家庭教育アドバイザー、町内外の乳幼児と親たちの協力を得て、中学３年生を対象に実施しているものです。当日の授業では鳩山幼稚園にて１学級ずつ２時間続きで行われ、まず乳幼児の基礎知識を学び、班に分かれ、人形で抱き方の練習を行ってから、乳幼児のお母さんから子育ての話を聞き、順番に乳幼児を抱っこしました。

実際、僕は、ふれ合い授業がとても貴重な体験だったと思います。赤ちゃんを抱くのは初めてだったので、最初は緊張していました。どうしたらいいのか分からずにいました。しかし、お母さん方は、僕達中学生にも優しく教えてくれました。赤ちゃんにどう対応したら良いのかをしっかりと勉強することができ、とてもうれしかったです。この体験のおかげで、もし将来自分が子どもをもっても慌てることなく落ち着いた対応ができると思います。

また、このような機会を与えてくれたお母さん方には、感謝しています。お母さん方は知らない中学生のために自分の子供を僕達にあずけてくれました。この行為をするのは、実際、自分の赤ちゃんに何も起きないか心配だったと思います。しかし、僕達を赤ちゃんとふれ合わせてくれました。ここに僕は町の協力の素晴らしさやありがたさを身にしみて感じました。

それから、僕達は、お母さんたちからたくさんの話を聞きました。赤ちゃんを産むこと、そして育てることの大変さを実体験を聞いて良く知ることができました。一つの命をもつということの重大さにも気づくことができました。

僕は、自分のお母さんに今まであまり感謝をしてきませんでした。ただ、このふれ合い授業のおかげでお母さんの大変さに気づくことができました。毎日ご飯をつくってくれること・学校生活のサポートをしてくれること等たくさん感謝をすることがあります。だから、今後はしっかりと感謝をしていけるようにしたいです。

今回は、ふれ合い授業で、赤ちゃんを育てる大変さや命の大切さをより知ることができました。しかし、最近では、育児放棄などのニュースを見ることが少なくありません。赤ちゃんの気持ちを考えない親がいるのも確かです。だから僕は、一人一人がもう少し命の重大さを知ることが大事だと思います。そうすれば、育児放棄もなくなっていくと思います。

今回のふれ合い授業は、たくさんの事を考えさせてくれました。この貴重なふれ合い授業、そして町の皆さんの優しさに感謝しています。本当にありがとうございました。

「皆で造る社会」

一般　宮寺　隆幸

私が今回話すのは、大まかに皆で造る社会ということで、簡単に言うと、誰もが取り残されない社会であり、なおかつ意見を平等に共有できる場や、個人が行動する意欲が持てる社会というものである。

特に私が皆で造る社会という題の中で、ピックアップして意見を述べたいのは、若者の参加ができる社会についてである。超高齢化社会であり、かつ少子化が進行している世の中で、若者の意見が注目されない社会というのが、必然的に少なからずあるのではないかと私は感じる。

ここでの若者の定義を話していく。世界的にも曖昧であるものの、日本においては１８歳以上、３５歳未満であると考えられることが多いことからその年代を前提として話をする。つまり、私も若者の一人であるということを前提として、話を聞いて欲しい。私が思うに、このような若者の意見は、日本における年を重ねたら尊敬されるべきという基本思想とともに、意見が潰されがち、もしくは、必然的に発言しづらい社会が形成されてきていると感じる。意見が潰される部分については、表現できているだけまだよいものの、必然的に発言しづらい状況に関しては、表にでない分、気をつけていかなければならないのではないだろうか。若者がSNSに没頭する理由等も、そのような観点からも起きている現象のように私は感じている。

若者が社会に参加することに関してわかりやすい指標が、選挙である。
例えば、１８歳から選挙権が与えられることになったが、それも形だけであると私は感じる。政治にもはや関心がないのに、誰に投票すれば良いというのか。私は政治関心が強く、若者の社会参加が目立つスウェーデンと比較する勉強をしてきた。数字としてみると、日本の若者の投票率は、４０パーセント前後、２０代に関しては３３パーセントととても低いのに比べ、スウェーデンでは、若者の投票率は８０パーセント以上である。またさらに、日本は年齢が上がれば投票率も上がるが、スウェーデンは年齢的差異が少ないのです。日本には３０歳以下の国会議員が少ない中で、スウェーデンの国会議員の１０パーセントが３０歳以下であるなど、若者意見が国に通りやすい環境が整っている。スウェーデンでは若者が参加するために様々な実践が行われているが、時間の関係上そのような話は省かせていただく。また、海外のことで文化が違うからという人もいるが、日本で行われていない実践であって、そのようなことを口出しする権利はないということを理解していただきたい。ここで、日本において若者が必然的に意見を言いづらい世の中には、子どもの頃からの生活環境が大きく影響していることについて、自分の事例をもとに話す。

私は中学生の頃、人権作文を書き、学年で選ばれ、全校の前で発表することになった。課題として誰の目も気にせず、自分のいじめと感じる出来事を受ける事実をもとに自分の意見を書いたのを覚えている。しかし、発表の前、先生に書き直すことを命じられた。確かに、国語的な部分での修正もあったが、自分の書いた内容の修正も求められたのである。自分の想いは、なるべく刺激的でなく、敵を作らないようなものに、、、それはつまり、私自身を守るために、もしくは先生にとって何も問題のないような形に整えられ、発表することとなったのである。私は、その時点で発表するための意欲はなくなった。私の意見は、先生の経験に包括され、潰されたのである。しかし、先生が全てであるということを信じ込まされていた自分は、何もできることなく、従うしかなかった。このような私は中学生時代、成績もよい方で学級委員も行うなど、学校において、模範的な生徒であったことは問題ない。

このことと、若者の参加には何も関係がないように見えて、強く関係しているので班はないかと私は考える。以上のように述べてきたのは、つまり私は、学校や教師の求める生徒になろうとしていたということであり、それこそが正解であると思っていた。それが間違っていたというわけではないが、最終的な答えが学校側から提示され、見えていたという部分に問題がある。つまり生徒は初めから答えを探す必要などないという感覚になるのだ。教育というのはそもそも、覚えてほしいことを伝えるのではなく、遠回しな事柄と間を投げかけて本人に考えさせることである。答えは生徒自身で作っていくものであり、先生が最初から提示するものではない。人生に答えなどないのに、あたかも答えかと思われるようなことを提示し、答えを考えさせる機会を奪うこと自体が間違っているのである。日本の教育において、この本人に考えさせるということは、大きく欠如している。

これはちょっとした一例でしたが、日本社会において自分の意見は年長者や目上の人に包括されることが多い。年を重ねて経験を得ることで自分も知るのであれば、今、自分から新しい感覚や意見を述べることは意味がないのだという感覚に必然的に陥らせるのである。

若者が社会に参加しないのには、このような教育や社会のシステムによって、心の根本に若者が意見を言っても意味のない環境にいるという自覚に植え付けているからではないだろうか。年をとれば尊敬される。確かに経験は増えるかもしれないがそれが全てではない。尊敬する・しないは社会の年功序列などのシステム的に決めることではなく、個人が主体的に決めるものである。経験を自慢して尊敬される対象となりたいのは、ただ他人と比べて自分自身を優位な立場にしたいだけの欲望にすぎないのだ。経験は確かに個人の中で自信になるかもしれない。しかし、経験をもとに、その人が人生をどのように捉え、どの

ように学びをしてきたのが大事であり、そのことを他者と共有することによって、初めて真の尊敬という言葉が生まれる。つまり、尊敬とは他者との関係で、尊敬の対象になりたいと考えている人が尊敬を助長するのではなく、相手が自ら生み出すものである。
この基本的前提を忘れている人が多いのが日本の現状であり、若者が意見を社会に対して発言しにくい根本になっている。形式的な尊敬の下で、若者は生かされているのである。

でも、そもそもなぜ、若者が社会に参加しなければならないのか？答えは単純である。日本は民主主義社会である。また、その中で、その社会で生活基盤を作り、生活していくのは若者であるからだ。つまり、その地の伝統や文化を継承するとともに、持続可能な生活環境を形成することを前提とした考えを持っているのだ。だからこそ、将来性を考えた上で、現実的に社会をより良いものにしていくには、若者の意見を取り入れる必要がある。明るい未来の話など、誰でも考えるほど簡単に想像がつくものである。その実現を真剣に考えるのならば、多世代で考えることが求められ、若者の意見は欠かせないものになるのではないだろうか。

今回、私は若者として意見を述べさせていただいた。今までの話を、社会が受け入れるか、受け入れないかは、私個人の問題ではないが、この先の世の中が、若者を含む皆の意見が平等に扱われるようなものになることを期待したい。

「ハトミライ☆プロジェクト２０１９」

鳩山高校生徒会　田野邊鈴宝
池田　裕太

皆さんこんにちは、鳩山高校生徒会　田野邊です。

去年は全生徒会長の荒山がここで未来の鳩山町についてのスピーチをさせていただきました。

そして、本日はその時に提案した「ハトミライ☆プロジェクト」のその後の成果についてお話したいと思います。

まず初めに、「ハトミライ☆プロジェクト」とは前会長の荒山が計画した鳩山町の活性化、自然の有効活用、知名度の向上、鳩山町への地域貢献を目的としたプロジェクトです。

他にも、鳩山町は現在高齢化が進んでおり、町の半数が高齢者です。それに伴い、人口が減少しつつあります。そんな今だからこそ、鳩山町の魅力をもっとたくさん人に知ってもらおうと考え、計画したのがこの「ハトミライ☆プロジェクト」です。

私たちは、このプロジェクト内容のもと、今まで様々な活動をしてきました。

前生徒会長荒山の地元であるこの鳩山町の活性化の為に何度もプロジェクトの構想を練り直し、鳩山高校を中心として鳩山町全体を盛り上げられるものといえば、春に咲く桜がこのプロジェクトのイメージにピッタリではないかと思い、そこから桜を使ったイベントを実施しようと考えました。１０月末頃に鳩山町役場を訪れ、鳩山町長の小峰孝雄様に企画の提案をしました。そして、１１月頃に行われた町内イベント「言ってんべー・聞いてんべー大会」で少しでもこのプロジェクトを実現に近づけるべく、プレゼンテーションを行いました。

そして、多くの期間を経て、ついにこのプロジェクトを実現することができました。行ったボランティア活動は、農村公園での“桜の苗木”の植樹と記念のメッセージカードの作成というものでした。小学生からお年寄りまで「福島の皆さんへ元気でいてください」や「桜がたくさん咲いて、たくさんの方々が元気になりますように」などたくさんのコメントをいただきました。この“桜の苗木”は毎年ボランティア活動でお世話になっている福島県で活動されている団体「ふくしまサクラモリプロジェクト」から提供していただきました。当日は普段から顔を合わしている生徒達や先生方だけでなく、お世話になった小峰町長様や鳩山役場の方、テレビ会社の方、そしてご家族でいらした方など、非常に多くの人にお越しいただくことができました。

定期的な見守り、水やり

生徒会では、桜の植樹を行ってからこれまで、朝の清掃活動と共に植樹した

桜の見守り、水やりをしてきました。

夏の連続的な猛暑や、台風などで桜の状況が不安定な時期がありましたが、特に大きな問題もなく無事に育っています。

これからも定期的な見守り、水やりを続けていきます。

次の植樹場所についての役場と会議

次の植樹場所は話合いの結果、石坂の森となりました。石坂の森は登校中のバスで通る途中にあり、バスを経由すれば簡単に行くことができます。

石坂の森に桜を植えれば、バスの中からでも桜を見ることができますし、桜を植えることで石坂の森を通してたくさんの人と交流ができます。

コットン畑の収穫、次の桜の植樹場所について生徒会の池田君にお話ししていただきます。

コットン畑の収穫

皆さんこんにちは、生徒会の池田です。新たに始めたコットン畑と第２弾の「ハトミライ☆プロジェクト」についてお話します。

１０月１６日に、福島震災復興活動の一環として、鳩山町の奥田でオーガニックコットン畑の収穫活動を行ってきました。

この活動の発端は、２０１３年から鳩山高校で取り組んでいる、福島震災復興ボランティアでお世話になっているいわき市の「NPO 法人ザ・ピープル」の皆さんに、コットンの種を提供してもらい、それを生徒会本部役員を中心に相談し、町内の休耕地で栽培し、福島に送って活用してもらおうと考案したのが始まりです。

「元気パートナーズ」の吉沢真由美様の協力もあり、農地を無償で提供してもらい、５月に種をまき、夏場の草刈り活動をし、７月下旬ごろには白い花が咲き、それからすぐ綿がでてくるまで順調に成長を続けてきました。

それから１０月１６日に鳩山高校生計２３人のメンバーで収穫を行いました。

この活動で収穫したコットンの綿は、乾燥させてから福島に送る予定です。

今後も機会があるのなら、是非こういった活動をしていきたいと考えています。

これからの活動について

これからの「ハトミライ☆プロジェクト」では、来年の３月下旬に第２弾の桜の植樹をしていこうと計画しています。これまでの活動を途切れさせることのないようしっかりと後輩の生徒に繋いでいき、この桜の植樹活動をこれからの伝統にしていき、これからの鳩山町の発展と、町の活性化に貢献していけたらと考えています。

また、桜の植樹活動としては、鳩山町と連携して様々な企画を計画、実行して、今までよりもさらに鳩山町の発展に貢献していきたいと考えています。

そのためにはまず、私たち生徒と町民の方々が協力しあい、若者の世代と高齢者の世代が触れ合い、町や学校の発展に繋げ、最終的な目標である鳩山町と連携した「桜まつりの開催」を現実にできるよう頑張っていきたいと思っています。

以上で私たちの発表を終わりにします。最後までご清聴いただき、ありがとうございました。